

モニタリングシート（英文学科）

No.	モニタリング項目	データ	データから見る点検結果（概要）	課題	改善へのアクション
1	前年度の向上・改善施策の実施状況（成果・課題・継続事項）はどのような状況か。	・自己点検・評価から見る課題に対する向上・改善施策	各種のアンケートで顕在化したこれまでの課題（シラバス、評価、進路との関連等）を踏まえて、学科の名称変更に伴うカリキュラム改革を計画的に推進していく。	新たに比較文化関連の教員が採用されたが、受験生が求めるものとして、現在の学科所属教員ではカバーできない英語文化関連の専門領域や技能等もあると思われる。	教員間で課題を共有する。今年度は在学生への調査や高校訪問などを通じて、さらに現状の調査を進め、今後のカリキュラム改革に生かしていく。それにあわせて新規採用教員の人事を進める。
2	経年でみた志願者動向はどのような状況か。	・各種入試結果（入試区分別・高校ランク等）	徐々に志願者数、入学者数が減少しつつあり、入学者全体のレベルの低下も懸念される。過去3年はコロナの影響もあり、英語・国際系の志願者が減少したと思われる。	徐々にコロナの影響もなくなりつつあるが、英語・国際系を取り巻く状況は引き続き厳しいものと思われる。	学科名を「英語文化コミュニケーション学科」へと変更し、それに合わせて新しく教員を採用し、カリキュラム改革を推進していく。
3	経年でみた新入生の動向はどのような状況か。	・新入生アンケート（第一志望・選択理由・本学への期待等）	新入生のアンケートで特に大きなニーズの変化は見られないが、第一志望の入学者が半数以上おり、高い期待を持っている学生も十分に多いと思われる。	伝統的な英文学科での文学を中心とした教育から、より幅広く文化や実用的な英語を教授する、時代に応じたカリキュラムへと改革が求められる。	令和7年度からの大幅なカリキュラム変更に向けて、高校生や在学生のニーズを十分に考慮しつつ、より充実したものとなるように検討を進めていく。
4	入学者選抜が入学者受け入れの方針（AP）で求める学生を適切に選抜するものとなっているか。	・選抜機能評価（各入試方式と其後のGPA/単位修得状況/留年・中退状況との関係） ・ジェネリックスキル測定テスト（1回生） ・新入生アンケート	平均すると、全体として入試区分別入学者のGPAは3.0前後であり、大きな差は見られない。例えば京女高からの入学者は1回生時のジェネリックスキル測定テストにおいて特に高いわけではないが、其後の累積GPAでは逆に特段低いわけではない。	一部の入試方法（AO入試、指定校A、一般後期、センター利用後期、編入など）による入学者は一桁台と少ないので、他の方式による入学者と同列に比較することは難しい。また同じように、一部の同区分による入学者の経年変化を測定することもできない。	一般後期やセンター利用後期で入学するものは、数は少ないが、コンピテンシーやGPAの平均が不安定である。可能性としては、不本意入学のために十分な勉学意欲を維持できていないのかもしれない。こうした学生を把握しておいて、注意して見ておく必要があるかもしれない。

No.	モニタリング項目	データ	データから見る点検結果（概要）	課題	改善へのアクション
5	DP・CP と関連したカリキュラムが各学位プログラムレベルで適切に設計されているか。	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラムマップの状況 ・ALCS 学修行動比較調査（経験） ・卒業時アンケート（経験） 	「知識・理解」や「汎用的技能」などの項目の修得度は比較的高い。人文、社会、自然などの広い教養を有しており、日本語を正確に理解、表現できる能力がある程度身につけている。	「社会性・自律性」や「自立性」の項目はあまり高くない。組織の中で自らの専門的知識や技能を生かしたり、適切にリーダーシップを発揮したりする力、また卒業後も生涯を通じて学び続けられる学習能力が身につけていない。	より専門的な知識を高められるような科目の充実、またグループでの学習の機会を増やすなどのカリキュラムや授業自体の改革が求められる。また生涯学び続けられる動機付けが必要と思われる。
6	カリキュラム・授業は、適切に運営されているか。	<ul style="list-style-type: none"> ・授業アンケート ・ALCS 学修行動比較調査（経験） ・卒業時アンケート（経験） ・最低修業年限卒業率 	卒業時の満足度平均は 3,94 であり、全学平均の 3,56 と比較してもかなり高い。幅広い知識や教養が身につけられる授業が多いと評価されている。なお本学科の場合、一定数の学生が留学のために休学や留年をする。	一方で国際感覚が身につく授業、将来の職業に役立つ授業は十分に多くはない。また留学の支援・制度や目指す資格が取得できる体制も十分ではない。語学力も学生の期待ほどには向上していない。	将来の職業に役立つ、資格取得に結びついた実用的な授業の充実を図る。また国際交流課と連携して、留学の支援・制度をいっそう充実させていく。さらにより効果的な語学力の向上を目指した授業を展開する。
7	DP にもとづく学修成果の到達度の状況。	<ul style="list-style-type: none"> ・ジェネリックスキル測定テスト（3回生） ・ALCS 学修行動比較調査（修得度） ・卒業時アンケート（修得度） 	リテラシー、コンピテンシーともに著しく修得度が低い能力はないと思われる。課題発見力や情報収集力は順調に伸びている。対課題基礎力も過去 2 年は十分な伸びが見られる	構想力や言語処理能力の伸長は十分ではない。情報分析力や対人基礎力もあまり伸びていない。これらの能力向上と授業との関連を精査する必要がある。	1, 2 回生の演習や 3, 4 回生のゼミにおいて、自ら課題を発見し、情報を収集・分析し、グループで日本語や英語を駆使して作業を進め、プレゼンを行うなどの授業展開を、学科として検討していく。
8	進路・就職及び免許・資格取得状況。	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業時アンケート（修得度） ・進路・就職結果データ ・免許・資格取得状況 	就職決定率は過去 3 年でほぼ 100%に近く、全学の平均を上回っている。教員や公務員になるものも一定数おり、就職状況は悪くないと思われる。	本学や他大学の大学院に進学するものがほとんどいないのは、十分な専門的教育ができていないからと思われる。また留学するものもそれほど多くはない。	新学科へのカリキュラム改訂にあわせて、卒業後も自立的に学習を継続できるよう、より充実した英語教育と専門的な教育を両立させていく。

No.	モニタリング項目	データ	データから見る点検結果（概要）	課題	改善へのアクション
9	各科目の成績および卒業論文・研究が適切に評価されているか。	<ul style="list-style-type: none"> 各科目の成績分布 卒業論文・研究の判定結果 	昨年度は卒業論文・研究を客観的に評価するための指標を作成し、試験的に一部実施した。今年度はそれをさらに改善し、より多くの対象を評価していく。	同一科目において担当教員間で評価のばらつきが見られるものがある。特に非常勤教員の成績評価については十分に把握し切れていない。	同一科目において複数の教員間で極端な成績評価のばらつきがないように、担当者の間である程度調整する。また非常勤講師の成績評価についても一定の指標を示していく。
10	職位・年齢のバランス、非常勤比率に留意し、かつ、カリキュラムに基づく教員組織となっているか。	<ul style="list-style-type: none"> 所属教員の状況 科目群別非常勤比率 	主要な科目については専任教員を配置している。また非常勤比率も他学科と比較して特に高いわけではなく、問題はないと思われる。さらに英語のネイティブ教員が3名となり、より充実した語学教育が行われている。	現在学科教員 12 名中 8 名が教授、4 名が准教授であり、教授比率は 66,7%である。また女性教員は 4 名で比率は 33.3%であり、特に問題はない。平均年齢は 54 歳である。	左記のとおり、特に教員編成に問題はないが、職位や年齢、性別のバランスを考えると、今後は講師としてより若手の女性教員の採用が求められる。
11	学科個別の FD について、課題認識および今後の方向性、外部環境を踏まえた FD を実施できているか。	<ul style="list-style-type: none"> FD の取り組み状況 前年度点検シート 自己点検・評価から見る課題に対する向上・改善施策 	昨年度は京女校英語教員との懇談を通して、高校生の学習内容とニーズの把握に努めた。引き続き受験生が求めるものと大学での学び、さらにその先の進路へとつながる学修を連関させていく。	英語教育という点で、大学での学びが高校での学びと一部重複していると思われる。また卒業後に大学院進学や留学をするといった選択肢につながる、より専門性を深めるための教育が十分に行われていない可能性がある。	カリキュラムの改革に合わせて、特に 1, 2 回生での英語教育の見直しを行い、専門科目の充実を図る。FD 活動として、2 回生後期にゼミと大学院の説明会を実施し、進路についてのアンケートを取る。
12	上記以外で「継続すること」「課題」「次へのアクション」「全学レベルで検討すべき事項(提案)」があれば入力	<ul style="list-style-type: none"> 各種データ 	過去 3 年間ほど、1 回生に対して留学に関する意識調査を行っている。また TOEIC や TOEFL のスコア分析も続けている。さらに卒業論文・研究のルーブリック評価を試験的に実施している。これらにより一定の情報を蓄積しつつある。	現在は調査や分析、試験的実施の段階であり、それらを今後どのように活用していくかの議論はまだ十分にできていない。	今後はこれらの調査や分析結果を活用して、具体的にどのようにすれば留学希望者を増やせるか、あるいは英語能力試験のスコアを上げられるか、また卒業論文や卒業研究を客観的に評価し、フィードバックできるかということ議論していく。